中学生の挙手行動に関する研究～個人の内的要因と状況要因からの検討～

発表者　：杉浦　千珠子
指導教員：中間　玲子

【問題と研究目的】

本研究の目的は、学校現場で用いられる挙手行動について個人の内的な要因と外的な要因の影響を検討することであった。まず、個人の内的要因を、全般的に安定して存在する個人の性質と、ある状況下においての個人の状態とに分けた。個人の性質について、他者を気にする事が挙手に影響しているという考えから、他者志向性を用いた。他者志向性とは他者を意識して自身の行動を制御する性質で、他者志向性尺度によって計測できる。

【調査方法】

調査対象者：　兵庫県東播地域の中学校２年生、男子８１名、女子８６名の計１６７名を対象者とした。
方法：　質問紙調査を各クラスの担任教師に委託し、空き時間にそれぞれの教室で実施された。調査期間は２０１６年１１月であった。
調査内容：　他者志向性尺度（１１項目）について、５件法で回答を求めた。次に、普段どのくらい挙手をするのかの挙手頻度と、挙手をした理由と挙手をしなかった理由について５件法で回答を求めた。最後に、挙手を求められた時の場面と状況について４場面×４状況を設定し、それぞれの時の挙手頻度の測定を５件法で行った。４場面と４状況については後述する。

【結果】

１．他者志向性と挙手頻度

他者志向性が挙手頻度と関連があるのかを調べるために相関分析を行ったところ、負の相関が見られた。このことから、他者を意識して自身の行動を制御する性質が高いほど、挙手が抑制されることが分かった。

２．挙手をする理由、しない理由と挙手頻度

具体的にどのような理由が挙手に影響しているのかを調べた。挙手をする理由３０項目の因子分析の結果、「挙手自体への意欲」「非挙手行動へのネガティブ評価の回避」「強制・圧力」の３因子が抽出された。挙手をしない理由２９項目の因子分析の結果、「挙手行動へのネガティブ評価の回避」「挙手自体への不安」「責任逃れ」「同調」の４因子が抽出された。これらの因子と、挙手頻度との関連を相関分析によって検討した結果、挙手をする理由では「挙手自体への意欲」だけが有意な正の相関を示し、そのほかの因子は相関を示さなかった。このことから、挙手頻度の高さには、挙手をしたいから挙手することは関連があり、他者の反応や圧力によって挙手をすることは関連がないことが分かる。挙手をしない理由では「挙手行動へのネガティブ評価の回避」「挙手自体への不安」「責任逃れ」が負の相関を示し、「同調」は相関を示さなかった。このことから、挙手頻度の低さには、他者の反応を想定することや不安、自分が挙手しなくてもいいという考えなどが関連していることが分かった。

３．挙手場面という状況要因と挙手頻度との関連

個人の性質以外の要因がどのように挙手に影響するのかを調べた。まず、挙手を求められた時の状況について、自分が発表できる状態かという内的状況と、挙手をしている人がほかにもいるかという外的状況をそれぞれ組み合わせて、４通りの状況を設定した。また、意見発表か、文章化が必要か、正誤があるかという観点から、挙手を求められる課題場面を４つ設定した。「（１）クラスの係やクラス行事でやりたいことなどについて意見を出し合う場面」を、発言の自由度があるが、自身の内的な思考の発露は含まれない意見発表場面として、「（２）学校行事や体験活動などでの自分のことをふり返って、感想や意見をいう場面」を発言の自由度があり、自身の内的な思考の発露がある意見発表場面として、「（３）教科書通りのことを読み上げる場面」を、発言の自由度、意見、正誤の無い場面として、「（４）数字や記号などの答えのはっきりした問題を答える場面」を、発言の自由度、意見はないが、正誤がある場面として設定した。

（1）自己と周囲の状況による挙手頻度の違い

状況による影響を見るために４場面×４状況の挙手頻度を分散分析した結果、自分が発表できる状態の方が発表できない状態よりも挙手頻度が高く、ほかにも挙手している人がいる方が誰も挙手していない時よりも挙手頻度が高いことが分かった。これらから、挙手をしやすい整った状況とは、自分が発表できる状態であり、ほかにも挙手をしている人がいる状況であることが分かった。(Figure 1)

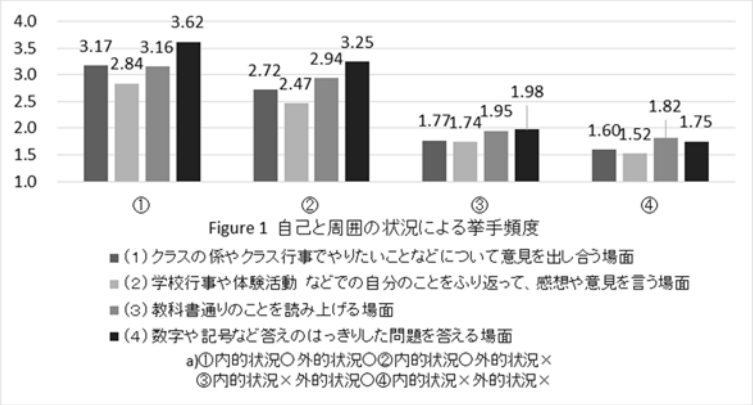

Figure 1 自己と周囲の状況による挙手頻度

（2）挙手を求められる場面（教師からの課題）による挙手頻度の違い

場面による影響を見るために４状況×４場面の挙手頻度を分散分析した結果、（2）の場面がどの状況でも挙手頻度が最も低かった。(4)の場面は、内的状況・外的状況の一方または両方が整っている状況では、最も挙手頻度が高いことが分かった。これらから、意見が含まれ、思考の結果が発露される場面は挙手をしづらいことが分かった。また、内的状況・外的状況のどちらかでも整っている時は、単なる読み上げ課題よりも正誤ありの場面の方がよく挙手をすることが分かった。(Figure 2)

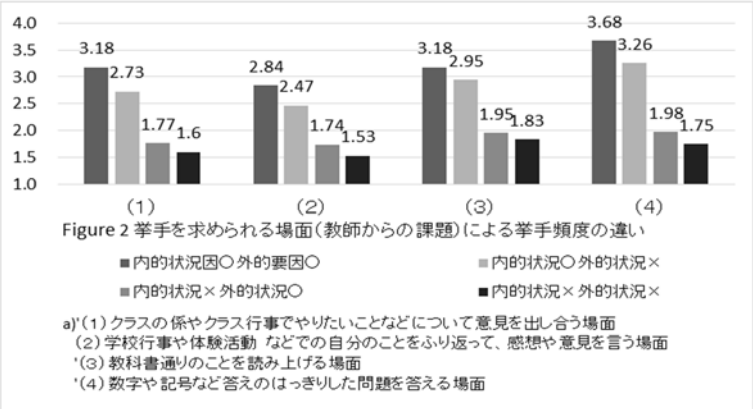

Figure 2 挙手を求められる場面（教師からの課題）による挙手頻度の違い

４．他者志向性を考慮した検討

（1）挙手をする理由、しない理由と他者志向性

挙手をする理由、しない理由と他者志向性との関連を相関分析によって調べたところ、「挙手自体への意欲」を除くすべての因子と正の相関が見られた。このことから、挙手頻度と直接関連のある「挙手自体への意欲」は他者志向性とは関連がないことが示された。また、他者を意識した理由と他者志向性が関連することが確認された。

（2）場面、状況ごとの挙手頻度と他者志向性

状況・場面ごとの挙手頻度と他者志向性との関連を相関分析で検討した結果、おおむね有意な負の相関を示したが、（2）（4）の場面の内的状況が整っていない時は相関を示さなかった。このことから、発言の自由度があり、自身の内的な思考の発露がある意見発表場面や、発言の自由度と意見はないが正誤のある場面では、自身が発表できる状態でないとき、他者志向性とは関係なく挙手頻度が低いことが分かった。

【結論】

挙手は一般的には、授業への積極的な態度として捉えられており、授業態度を評価する際の参考とされることがある。しかし、挙手は自身が挙手できる状態かという内的状況、ほかに挙手している人がいるかという外的状況、何のための挙手かという課題場面による違いと強く関連する。また、他者を気にするという個人の性質が、他者にどう思われるかをより不安に思う要因となり、挙手を抑制してしまうことにつながる。つまり、挙手をしなかった理由を、授業への積極性がないとだけ判断することはできない。よって、児童生徒の挙手行動を積極的な授業参加として評価する際は、加点措置にとどめるなど、注意が必要である。

【主な引用文献】

藤生英行(1996)　教室における挙手の規定要因に関する研究　風間書房

Mark Snyder (1986). Public appearances private realities the psychology of self-monitoring. W.H.FREEMAN AND COMPANY, New York, New York and Oxford（マーク・スナイダー 齊籐勇（監訳）(1998) .カメレオン人間の性格―セルフ・モニタリングの心理学―　乃木坂出版）